

◎次の文章をよく読んで、解答用紙一、の問いに答えなさい。

平安時代末期、鳥羽院(鳥羽法皇)が世を治めていた。そんな彼のもとには様々な人々が集まった。公卿・殿上人と呼ばれ、財力にとみ、この国の政治を動かす支配階級の身分高い貴族達、また、実務能力に優れた下級貴族、そして、国の統治を乱す者をしりぞける武士達などである。これらの人々はその能力やじんみやく、または財力によってそれぞれが鳥羽院のために力を尽くした。それはもちろん、鳥羽院に対する忠誠の表れでもあるが、最終的に一門の繁栄を目指してのことでもある。鳥羽院に仕える武士に忠盛という男がいた。忠盛もその一人であった。

忠盛の先祖は平城京から平安京に都を移したことで有名な桓武天皇であるが、平の姓を名乗り、皇族から離れ、臣下の一員として天皇家に仕えることとなった。しかし、中央政界での活躍の場を失い、都では生活していけなくなったので、一門は拠点を伊勢(三重県)に移し、その地に活路を求めた。(A)再び京都に戻り、はしたものの、なかなか確固たる地位は築けずにいたが、忠盛が鳥羽院に仕えることにより大きなてんきがおとずれた。忠盛は持ち前の武力で反乱者を捕まえたり、海賊を撃退したりする役目を担った。鳥羽院に認められてきた忠盛は国守(現在の県知事のような存在)に任じられるようになり、また徐々に財を蓄えていった。そして、忠盛は着実にその力を増していった。

そんな中で鳥羽院が得長寿院という寺を建てることになった。その寺の建立を忠盛が受け持つこととなり、忠盛は蓄えた財で一千一体の仏像をあんちする寺を見事に造りあげた。

鳥羽院はこの得長寿院のできばえに(B)感動し、寺のぞうえいに関わった職人全てにおんしように授けた。特に忠盛に対してははかくのおんしように与えた。殿上人になることを許したのである。殿上人とは天皇が政務を執ったり、有力貴族を集めて宴会を催したりする宮中の清涼殿という場所に入出入りすることを許された者である。多くの貴族達が殿上人になることを夢見るが、家柄が良いか父祖の力が強大な場合、あるいは特筆した功績をあげた場合にのみそれが許された。殿上人になり、さらに大きな功績をあげれば、公卿と呼ばれる存在になることもある。一方、殿上人ではない者達は地下人と呼ばれた。公卿・殿上人と地下人では全てにおいて明確な違いがあった。田舎侍とさげすまれてきた忠盛が殿上人になることを許されたことにより、貴族社会には衝撃が走った。特に忠盛より先に高級貴族として存在していた他の公卿・殿上人達が忠盛の存在を許せないで憤った。彼らは宮中で行われる祭りの日、忠盛を闇討にしようと考えた。

その計画を伝え聞いた忠盛は、

「私は書類を作成するような筆の力をもって、鳥羽院に仕えているのではない。武士の家に生まれ、その武力をもって仕えているのだ。そのような人間が闇討されてしまうなど、家の名誉も、また、自分自身の武士としての誇りさえも傷つけられるものだ」

と言って、危機を防ぐために準備を始めた。そして、祭りの当日、四〇センチメートルほどの腰刀を無造作に差して宮中に入った。忠盛は指定された座席についた後もこの腰刀に手をかけ、ときどき刀を抜いてはしまうという動作をくり返し、緊張感をただよわせていた。こうしておけば、きっと闇討をしようとしている者達が恐れをなして、闇討計画を実行にうつすことはしないだろうとの考えであった。忠盛の思惑通り、周囲の者達は忠盛の動きを注意して見るだけであった。

その上、忠盛に仕える家貞という男が衣服の下に鎧を着て、刀を脇にはさみ、祭りの舞台となる場所の庭に控えていた。家貞を見かけた公卿・殿上人達が、

「あれはいったい何者だ。許されもしない者がこの場に居るのは無礼である。早くこの場から立ち去らせよ」

と配下の者に命じた。しかし、家貞はこれに全く動じることもなく、

「私が仕えております忠盛様が今夜闇討されるとかがありました。ですからこうしてやってきたのです。たとえご命令であったとしても、今、この場を去ることはできません」

と言った。公卿・殿上人達には家貞の様子を見るに、もし忠盛に何かあれば、すぐに刀を抜いて斬りかかるつもりでいるように思われた。忠盛や家貞の振る舞いに恐れをなし、この闇討計画は未遂に終わった。

5 蘭討は成功しなかったものの、やはり忠盛のことを腹にすえかねていた公卿・殿上人達はその後の宴会で、忠盛が天皇に指名されて舞を舞っていたときに、皆で忠盛のことを皮肉をこめてはやしたてた。それは忠盛の一門がかつて伊勢にいたことや忠盛の身体の特徴をからかうものであった。忠盛としてはそのようなことをはやしたてられてもどうしようもなく、まだ宴会の途中ではあったが、帰ることにした。しかし、なぜか忠盛はその座からはなれる前に殿上人達に見えるようにして、自分が差していた腰刀を近くにいた女官に預けて立ち去った。忠盛が予定の時間より早く出てきたので、不思議に思った家貞が忠盛に、

「こんなに早くどうしたのですか。何事があったのですか」

と尋ねた。忠盛は、公卿・殿上人達にはやしたてられ、恥をかかせられたことを悔しく思い、家貞にこのことを言おうかとも思ったが、もし言ってしまったなら、家貞は、堪忍袋の緒が切れ、今すぐにでも刀を抜いて走っていかうとするだろうと考え、悔しさを隠し、家貞に対して、

「別に何もない」

と言つて宮中より出て行つた。

後日、憤りのおさまらない公卿・殿上人は鳥羽院につめ寄つた。彼らは一様に、

「忠盛のあの傍若無人の振る舞いは何ですか。いくらあ[あ]の家に生まれた者といつても、宮中に刀を持って入るのは禁じられております。また、兵を連れてくるのも特別に許された方だけで、そのような方は必ず(C) これまでの決まりを守られています。ですが忠盛といえは、家臣が刀を携えて庭にいるは、自身が勝手に腰刀を差して来るは、こんなことはいまだかつて見たことも聞いたこともありません。全くもって乱暴な振る舞いです。その罪をのがれることなどできません。殿上人としての振る舞いにふさわしくないことをする者など、殿上人として認めず、現在の役職も全て辞めさせ、かいにんすべきです」と訴えた。このことを聞いた鳥羽院は大いに驚き、すぐに忠盛を呼んで直接尋ねた。忠盛は、

「私の配下の家貞という者が庭にいたことは全く知りませんでした。ただ最近、人々が私に対して何らかの計画を企てているということをごんからかも知聞いたのでしよう。それで私が何か恥をかかせられることがないように、私に知らせず、(D) 忍びこんだのです。これは私には何ともしようがありません。それでもなお、家貞に罪があるのなら、家貞を差し出すべきなのでしょう。次に、私が腰刀を差していた件ですが、あの刀は帰る前に女官に預けております。その者をお呼びになり、私が持っていた腰刀がはたして本当に皆様がおっしゃるような罪にあたるのか、ご確認ください」

と言つた。これを聞いた鳥羽院は、

「もつともだ」

と言つて、女官に預けていた腰刀を確認すると、肝心の刃は木刀に銀箔をはりつけたものであった。

8 「さしあたっての危機をのがれるために腰刀を差しているように見せながら、後にこのように訴えられることを考えて、木刀に銀箔をはりつけたものを準備するなど感心なやつだ。武士として戦場に出る者はやはりこのように周到に準備計画をして臨んでほしいものだ。また、忠盛の配下が庭に忍びこんでいたことも主君に仕える武士として当然の行いである。これも忠盛の罪ではない」

と言われ、忠盛は(E) 鳥羽院に認められたので、このことについてこれ以上罪に問われることもなかった。忠盛を何とか追い落としてやろうとしていた公卿・殿上人達の[i]はおさまらなかつたが、鳥羽院が認めたからには手が出せるはずもなかつた。

忠盛はこの後も鳥羽院に仕えた。功績をたて、もうすぐ公卿に任じられるだろうと噂されるまでになったが、その目前で病のため死んだ。彼の願ひはその子清盛に引き継がれ、のちに清盛は父の願ひをこえ、武士として初めて貴族社会の頂点にまで登りつめたのである。

姓	名
姓	名
姓	名
姓	名

※この用紙には受験番号と解答以外は一切書いてはいけません。
※句読点やその他の記号も一字と数えます。

一、別紙の文章をよく読んで、次の問いに答えなさい。

① — a～jの部分の漢字に直しなさい(送り仮名が必要なものはそれも書くこと)。

a () () () () () () () () () ()

f () () () () () () () () () ()

② (A) () (E) に入る最も適切なことばを次の中から選んで、記号を書きなさい(同じ記号は二度以上使いません)。

ア いたく イ やがて ウ うっかり エ かえって オ きちんと カ こつそり キ ほとんど

A () B () C () D () E ()

③ あ、い に入る最も適切なことばをそれぞれ文中から二字ぬき出して答えなさい。

あ			
い			

④ — 1、なぜ忠盛一門は「田舎侍」にならざるをえなかったのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

() () () () () () () () () ()

⑤ — 2、忠盛は具体的にどのようなことをして鳥羽院に仕えていたのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

() () () () () () () () () ()

⑥ — 3、「忠盛の思惑」とはどのようなものですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

() () () () () () () () () ()

⑦ — 4、なぜ公卿・殿上人達はこのように思ったのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

() () () () () () () () () ()

⑧ — 5、公卿・殿上人達はどういうようなことを腹にすえかねていたのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

() () () () () () () () () ()

⑨ — 6、忠盛が腰刀を預けたのはなぜですか。

() () () () () () () () () ()

⑩ — 7、ここという「罪」とは忠盛が具体的に何をしましたことを指していますか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

() () () () () () () () () ()

⑪ — 8、「さしあたっての危機」とは何ですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

() () () () () () () () () ()

⑫ — 9、忠盛の「願い」とは何ですか。文中から五字ぬき出して答えなさい。

--	--	--	--	--

二、次の () に身体の部分を表すことばを入れて、慣用的な表現を完成させなさい(平仮名でもよい)。

① 壁に () (あり障子に) (あり。(密談などがもれやすいことのため))

② () (かくして) (かくさず。(悪事や欠点の一部をかくして、全体をうまくかくしたつもりでいること))

③ () (から) (が出る。(ほしくてたまらないことのため))

④ () (に) (はかえられない。(さししまったことのために他のことにかまっていられないこと))

⑤ () (と) (の先。(近くにあることのため))